

### 国語科における作文力育成のあり方について

—練習過程を重視して—

足利市立山辺小学校

#### I はじめに

文章記述力の弱さが指摘されて久しい。日常生活をふりかえると、文章作りの機会が少なくなってきた。電話の普及などで葉書さえ書かないですませることが多くなっているのではないだろうか。そうでなくても、一字一字書くということ、しかも、文の構成を考えて書き記すということには抵抗を持つことが多いのではなからうか。また、茶の間では、テレビの影響からか、映像文化に馴らされて、注意して聞くということが劣ってきているようにも思えるし、絵による理解のためか、文章を通しての知識の吸収の態度が十分でないようでもある。したがって、文章に対する感覚が磨かれることが少なく過ぎていくという危険も考えられる。

このように考えると、学力のある部分は、文章を通してつかむということから、この文章に対するセンスの拙劣さは、学力の向上を阻害する一因であるといってもよいのではないだろうか。

現実には、作文力の低下のみならず、読みの力の貧弱さまで目立っているように思えるし、当然のことながら、学力の向上についての心配が増幅されてきている。

日本人である以上、その母国語たるこの国語の文章に対する感覚を質的に高めて、貴重な文化遺産を大切に受け継ぐことは当然のこととして、さらには、相手の心情、考えを正確に理解すること、また、自分の気持ち、思想を正しく伝えて、相手に分かってもらえることは、生涯の中で、非常に大事な資質になるであろうと考えている。

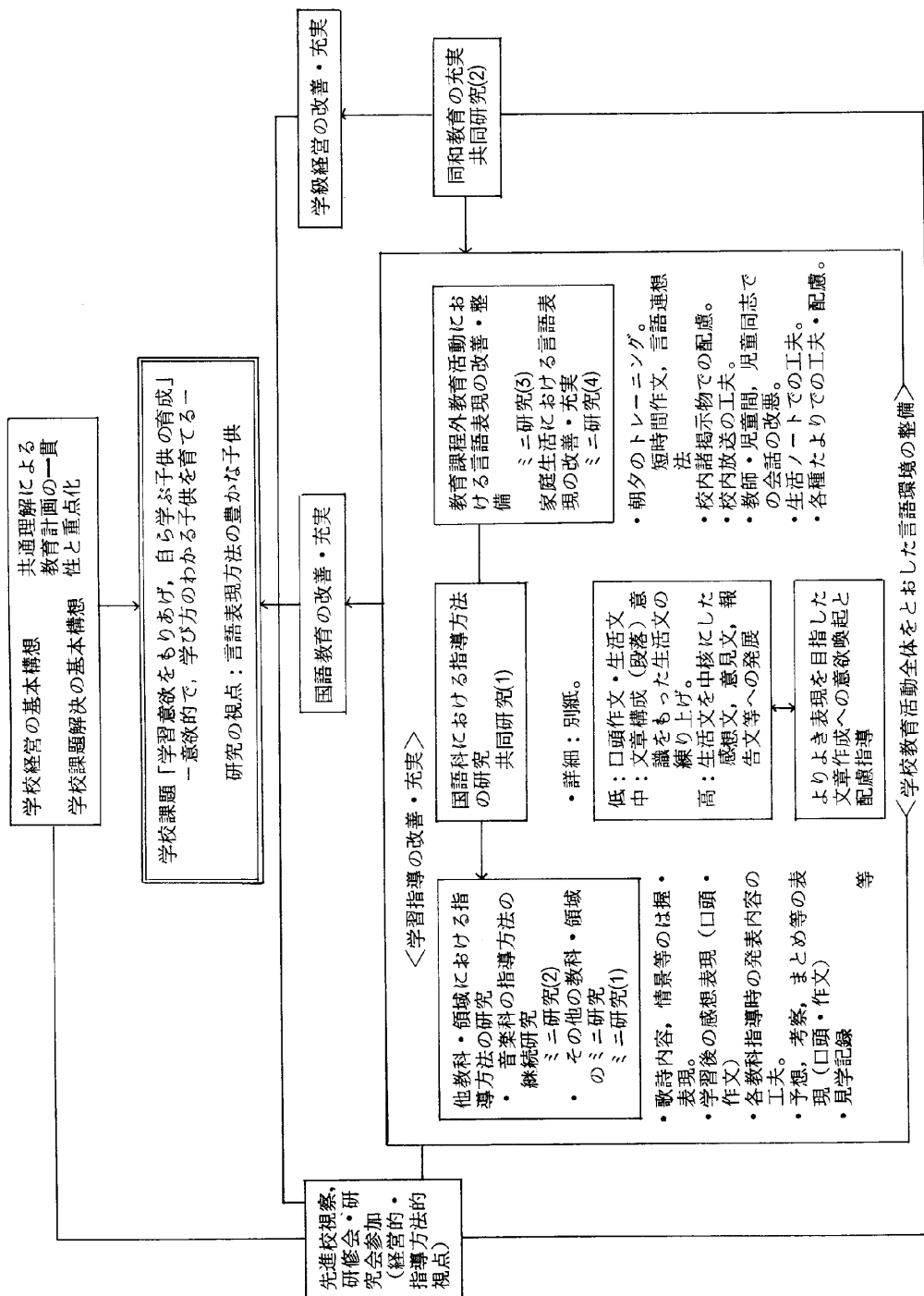
この文章に対する感覚の向上を図るための決め手になる方法というものは、むずかしく、限定しにくいことであろうと思うが、その一つの方法として、読解指導を深めてから作文記述へ進むという方法も考えられるであろう。しかし、私たちは、まず、文作りの指導、作文力の向上を図ることにより、文章構成の理解と感覚を高め、次に、これを通して、読みにおいても、文の作りに深い注意を払いながら、正確に読む、したがって、質の高い読みが可能になるであろうということを期待しているものである。

さらにまた、この作文記述力の育成方法についても、思考から入る方法と、感性を大事にしてやる方法と、その入り方にはいろいろと考えられるであろうが、私たちは、まずはじめに、文が書ける、文を書くことに、それほどの抵抗を感じないようにさせなければならないと考えた。そこで、見たこと、聞いたこと、味わったこと、触れたこと、かいだこと等の五感を通して経験したり、感じとったことから出発して、それらのことをよりリアルに、より生き生きと表現できるようにすることを大切にしたい。そのためには、発想を豊かにさせたり、表現方法に習熟させるための基礎能力の練習過程をとくに重視した。そして、基本的には、生活文をベースにして、作文記述力育成へと取り組んでみた。もちろん、学年発達段階に応じ、2年次においては、感想文、記録文(報告文)、意見文作りにも広げてきた。

以下、私たちの、ささやかな実践の歩みのあとを、この機会にまとめさせていただく。

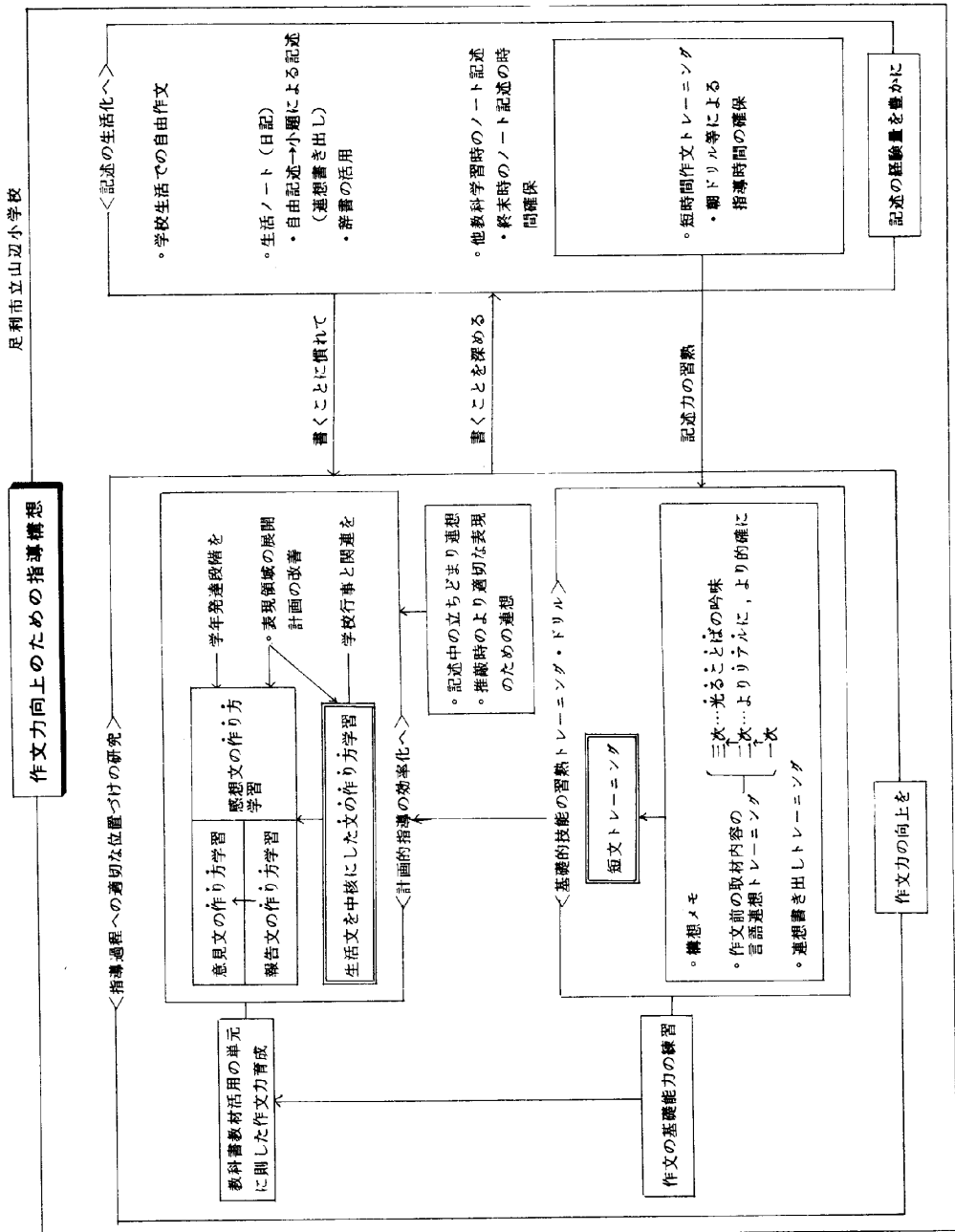
## II 全職員でどのように取り組んだか

作文力を育てるための研究は、学校全体の一つの研究内容として、全職員で、2か年間取り組んだわけであるが、その取り組みの全体構想を示す。



### Ⅲ 作文力向上のための指導構想をどのように組んだか

2頁に示した「全体構想」の具体的な指導の組み立てについては、次に示す図のようになっている。すなわち、全体構想の中の共同研究(1)については、本図の「指導過程への適切な位置づけの研究」で、同じく、ミ=研究の(1)~(4)については、本図の「記述の生活化へ」の部分が表示位置関係で、それぞれすすめていこうと考えている。



### Ⅲ 研究のねらい

1. 学年発達段階と、文の種類をふまえ、練習過程を重視した、一単位時間における作文の指導過程と指導方法を探る。
  - 作文の基礎能力（言語連想，短時間作文，短文）のトレーニングと，作文記述に関する一単位時間内での，時間的，内容的配分のしかた及び指導の順序について。
  - 指導方法の最適化について。
2. 作文の基礎能力トレーニングの方法を明らかにし，習熟を図る。
3. 資料の教材化の工夫。

### V 研究内容

#### 1. 研究課題と仮説

##### (1) 国語科研究の課題

豊かな言語表現力を持ち，たくましく学習に参加できる子供の育成  
— 特に，作文力をたくましく育てるための効果的な指導法の実践的研究 —

##### (2) 研究課題達成のための仮説

- ア 作文力の基礎能力の育成のために，言語連想，短時間作文，短文等のトレーニングで，その技能に習熟させることにより，言語による発想，表現，記述，構成等の能力を開発して，逞しい作文力を育成することができるであろう。
- イ 基礎能力トレーニング学習の成果を，指導計画に基づいて行う学習指導の基礎として生かし，さらに，取材，構想（構成），記述，推敲の各学習過程に有効に生かすことにより，よりの確な指導が可能になるであろう。
- ウ 作文力を逞しく育てることにより，「学習意欲をもりあげ，自ら学ぶ子供の育成」という，学校課題の達成に迫り，子供一人一人の自己表現力を伸ばし，記述力を高め，各教科，領域における学習への転移が可能となるであろう。

#### 2. 基礎能力の育成

作文指導において，そこには，いろいろな問題点を指摘することができる。すなわち，

- 子供達が作文を書くことに，抵抗感を持っていないか。
- 作文を記述し始めて，4～6行ぐらいでとまってしまわないか。
- 作文指導の時間の効果的指導のあり方はどうか。

等々，いずれをとっても，現実のこととして，その解決の必要を感じた。

そこで、私たちは、とにかく、まず、作文記述に当って、その抵抗感を少しでも取り除いてやらなければと考えた。

そのためには、「作文力を伸ばす練習学習法」を取り入れてみた。

この学習法は、短い時間で、頻度数を多く言語表現のトレーニングを積むことである。

その学習法を記してみると、次のとおりである。

### (1) 言語連想トレーニング

ア この方法の基本は、刺激語を示し、単語、単文で連想したことばをノートやカード等を利用して、記述したり、口頭表現をさせるのである。

イ 2～3分間という、短い制約された時間内で、集中して行う。

ウ 子供の成長の段階（実力）に応じて、易から難へ、具体物や具体的事象から、抽象語へ、また、リアルな表現から、感想、思考による表現へと向かわせるのである。

例えば、低学年児や指導の初歩的段階においては、具体物として、絵、図、写真等を利用して、そのものからの連想をとりあげ、発想がスムーズに出来るようにする。また、高学年児または、習熟度の高い児童には、抽象語、短文、詩歌などから連想させ、思考を発展させたり、集約させたりするトレーニングを行う。

エ 表現内容については、記述のねらいに応じて、集中的思考から拡散的思考へと発展させるとともに、この両者を大事にしていく。また、心情、情景、事実の三つの面からとらえる。

オ 自己評価のための評定の尺度を示し、向上、自己変容の確認をさせるとよい。また、結果をノートにてん付したり、とじ込みをさせるなどするとさらに効果的である。

### (2) 短時間作文練習学習法

ア まず、題を示すか、児童自身にきめさせる。

イ 2～5分間という短い時間で、連想語を書き出す。

ウ 書き出しの文章を考える。

エ 作文を一定時間内に集中して書く。時間は、ねらいに応じて、5～30分間程度内で選定する。すなわち、制限された時間内での作文の練習である。

オ 書いた文章の量的評価を自己評定する。

カ グループ内で廻し読みをし、質的な評価を加えて、グループの推せん作品を選ぶ。

キ グループ内推せん作品の朗読を聞く。

ク 課外の活動において、清書して、文集につづり込む。

自己評定の尺度； 段落の数、「 」会話文を入れる、必要によって決めた字句を入れる。さらに、情景、心情及び、事実の描写の表現等をみる。

### (3) 短文トレーニング

字数を予め一定量決めておいて、記述の練習をする。

ア 同じ題のもとに、200字以内とか、400字以内というように、一定時間内に完結した文章を書く。

イ 書き出しの文を変えて、一定量の文章を書く。

ウ さらに、表現の角度や視点、感想や考え方をかえて、一定量の文章を書く。(このトレーニング学習を可能なようにすることが、とくに大事である。)

次に、「小学校における作文力基礎学習トレーニング」における要点を一らん表にする。

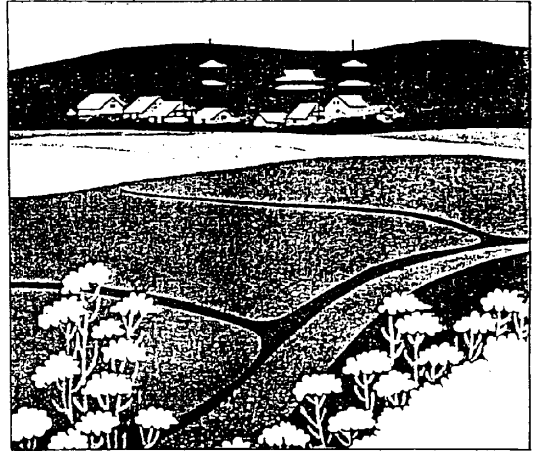
	指導(学習)の方法			指導上の留意点	備考
	低学年	中学年	高学年		
言語連想トレーニング	<ol style="list-style-type: none"> <li>絵、写真、ことばなどから気がついたことをたくさん言語表現させる。</li> <li>語を聞いて(本を読んでもらって)わかったこと、思ったことをたくさん言えるようにする。</li> <li>「ことば」をもとにして、気ついたこと、わかったこと、思ったことを書き出す。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>刺激語句をもとにして、連想したことを書き出すことができる。</li> <li>一次連想をもとにして、さらにくわしく、よく見えるように、わかるように連想して書き加えることができる。</li> <li>連想書き出しの中から、光ることをさがして、さらにくわしく連想することができるようにする。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>刺激語をもとにして、短時間に連想語を書き出すことができる。</li> <li>よりくわしい文章にするために、二次、三次連想による表現ができる。</li> <li>「光ることば」重要語句を生かして、短文を書くことができる。</li> </ol>	<p>㊦ 「具体物や生活経験」等をもとに、豊かな事実に基づいた言語表現ができるようにする。</p> <p>㊧ 刺激語をもとにして、言語連想による書き出しが、集中して、たくさんできるようにする。</p> <p>一次→二次連想に慣れる。</p> <p>㊨ 語句、文をもとにして、豊かな事実、感想、意見等が書き出せるようにする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>題(小題)、刺激語の工夫。</li> <li>経験重視、リアルに。</li> <li>生活文による習熟。</li> <li>㊩ 感想、意見の関連づけ指導の工夫。</li> </ul>
短時間作文トレーニング	<ol style="list-style-type: none"> <li>10～20分程度の時間に100～400字位の事実に関する文章が書けるようにする。</li> <li>2～4人位の作文を読んで、すぐれた作文を選ぶことができるようにする。</li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>5～20分程度の時間に200～800字程度の段落構成のある生活文が書けるようにする。</li> <li>2～6人位の作文を廻し読みして、代表作品を2～3点選ぶことができる。 <ul style="list-style-type: none"> <li>よい表現の箇所を見つけることができる。</li> </ul> </li> </ol>	<ol style="list-style-type: none"> <li>3～25分程度の時間に200～1000字程度の生活文または感想文や意見文が書けるようにする。</li> <li>多くの作品を廻し読みまたは読み聞きして、すぐれた表現がとれえられ、</li> </ol>	<p>㊩ 5～10～20分程度で、生活に即した文章を書くことができるようにする。</p> <p>「はじめに」「つぎに」「おわりに」(順序性)、「それから」「それで」「すると」「だから」(接続)などの語を使って、生活文が書けるようになる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>連想語書き出し。</li> <li>自己評価の基準。</li> <li>早書き用紙。</li> </ul>
短文トレーニング	<p>1年 教科書による基本文型の習得。視写応用</p> <p>2年・2～4語程度による短文ができるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>文末、助詞、接続詞の表現にわたらせる。</li> </ul>	<p>3年 3～8語位を用いて短文づくりが自由に行えるようにする。</p> <p>4年 5～10語位を用いて短文づくりが自由に行えるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>構成メモなどを活用して、3～5段落程度の構文ができるようにする。</li> </ul>	<p>5年 必要な語句を選んで、短文づくりが自由に行えるようにする。</p> <p>6年 観点を書いて文、文章をつくりかえることができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>重要語句を中心に文、文章を構成することができる。</li> <li>構想メモと併用して段落ごとの構文をすることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>数語による短文づくり。</li> <li>文末表現の工夫。</li> <li>接続語による文章表現の工夫と習熟。</li> <li>重要語句(キーワード)を生かした文章表現の習得。</li> <li>観点をかえての文章の再構成。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>語、句をもとにしての文、文章の構成。</li> <li>構想メモによる構文。</li> <li>段落内の小見出しやメモによる主要な文の構成。</li> </ul>
備考	親子読書の励行、読み聞かせ「ことば」への興味・関心を育てる。	親子読書→一人読書へ生活ノートの活用、「語句」調べ、辞書の活用	読書の励行、生活ノートの活用、「語句調べ」、辞書の活用の習熟	親子日記、生活ノート(PTA活動)、語の指導の重視	

3. 基礎能力育成に関する実際例

(1) 言語連想トレーニング

ア 絵利用 (初歩的段階の指導として有効であるが、イメージが制約される) の場合

。時間 3.5 分間、田園春の表紙絵を示して自由に言語表現させる。



例 2年, 中田君

- |           |            |
|-----------|------------|
| 1. 花咲いている | 7. くもが一つし  |
| 2. 田がある   | かない        |
| 3. お寺がある  | 8. とおり道が細  |
| 4. 山が見える  | い          |
| 5. うちが見える | 9. あかいそら   |
| 6. あかいうちが | 10. きいろい花が |
| ある        | さいている      |

イ 刺激語を与えた場合

。5分間、「ゲーム開始」の刺激語を与えて、自由に言語表現させる。

4年1組で、「ハンターゲーム」をやったときのことを作文する事前の連想語。

例, 中村さん

- |            |              |                     |       |
|------------|--------------|---------------------|-------|
| 1. いちご     | 11. やぶ       | (21) 木の間            | 31 大声 |
| 2. こえ      | 12. カセットテープ  | 22. じめん             |       |
| 3. ボーイ     | 13. ろくおん     | (23) はっぱの中          |       |
| 4. 呼ぶ      | 14. いそがしい    | (24) 石のした           |       |
| 5. 見つける    | 15. 三田くん     | 25. ぐにゃー            |       |
| 6. 声をからす   | 16. ハンター     | 26. チーズバーガー         |       |
| 7. とんでくる   | (17) 気になる    | (27) いろんな声がまざりあっている |       |
| 8. すっとんでいく | (18) ふくろのえもの | 28. 犬               |       |
| 9. きこえる    | 19. 木の根っこ    | (29) あんごう           |       |
| 10. まざりあい  | (20) 木のはの中   | 30. こうぶん            |       |

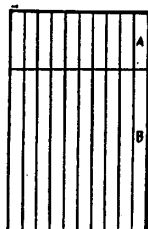
この指導における連想語の自己評定表によると、この児童は、26語以上で、(A)の最高の段階に入っていた。なお、この連想語の中から、次の指導の段階で、短時間に書く作文に使う語に○印をつけさせている。

連想語の自己評定表 26以上 (A), ~25 (A), ~20 A, ~15 (B),  
~10 B, ~5 ○, ~2 △

ウ 連想用紙

学校として統一していないが、児童の発達段階に即して、それぞれ工夫している。次に、その具体例を示す。

低学年

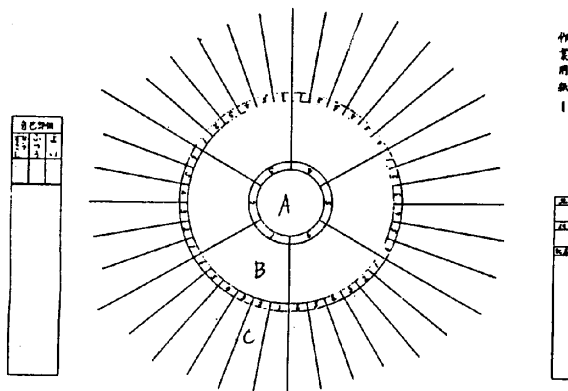


Aのらんに連想語

Bのらんに短文

中学年

無けいで、葉書より少し大きめの用紙を使ったり、図のような形式のもの



を使用している。

この形式で、

Aには、刺激語、

Bには、一次連想語

Cには、二次連想語

が書かれ、さらに

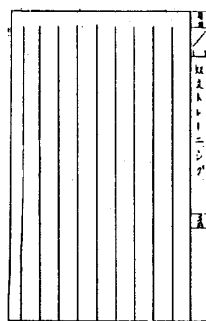
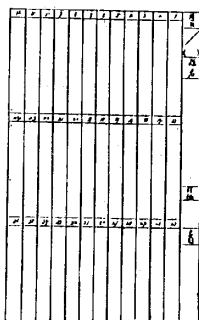
自己評価のらんもつ

けている。

高学年

高学年になると、きめら

れた時間内で、かなりの数の連想語を書き出すことができるので、多くの場合、多少のちがいはあっても、左図のような形式のものが用いられている。



(2) 短時間作文トレーニング と、短文トレーニング

この事例は、指導の実践例のところでも示したい。用紙の形式は、主に、高学年においては、短時間作文と短文の両トレーニングで、上図右に示す、短文トレーニング用のものを使用している。すなわち、マス目を作らない。短時間作文のときには、一枚書き終わり次第教卓上に置いてある用紙を、個別に自由に取りに来て、次々と書いていくという方法をとっている。中学年においては、原稿用紙状のマス目のある用紙を使用するときもある。



#### 4. 表現領域題材一覧

学年 月	1	2	3	4	5	6
4		<ul style="list-style-type: none"> <li>書くことを見つけた (教) 7)</li> <li>作文ノート (基) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>書くことがいっぱい (教) 5)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>いちばん書きたいことを (教) 7)</li> <li>作文ノート、メモの工夫 (教) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5年生になって (応) 1)</li> <li>深く見つめて (教) 6)</li> <li>作文ノート (教) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界を広げて (教) 4)</li> </ul>
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>ぶんをつくって (教) 11)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>春のえんそく (応) 4)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>楽しかったことを (応) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>春の遠足 (応) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>読書感想文の書き方 (応) 3)</li> </ul>
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>せんせいあのね (教) 5)</li> <li>おはなしづくり (基) 1)</li> <li>うらしまたろう (教) 1)</li> <li>かきましょう (教) 8)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ことばのペンきょう (教) 8)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>遠足 (応) 3)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>宿泊学習 (応) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>修学旅行 (応) 3)</li> </ul>
7	<ul style="list-style-type: none"> <li>かきましょう (教) 6)</li> <li>「は」「へ」「を」のつかいかたをかんがえてかく (応) 1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>よく見て (教) 1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>よく見て大事なことをきちんと (教) 9)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>組み立てを考えて (教) 10)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見を (教) 8)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>意見や考えを (教) 4)</li> </ul>
9	<ul style="list-style-type: none"> <li>演劇教室の感想文の書き方 (応) 2)</li> <li>のりものあそび (教) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>たのしい人形げき (教) 9)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>演げき教室 (応) 3)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本を読んで (応) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>体験を通して (応) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>青少年作文の書き方 (応) 3)</li> </ul>
10	<ul style="list-style-type: none"> <li>じゅんじょをかんがえてかく (基) 1)</li> <li>うんどうかい (応) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>パン工場のけんがく (教) 5)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>運動会 (応) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>がんばったことを (応) 2)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>生活文の書き方 (応) 3)</li> </ul>
11	<ul style="list-style-type: none"> <li>おもしろかったことをかこう (教) 6)</li> <li>うちのひとにおたよりをかく (応) 2)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>目に見えるように書こう (教) 6)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>すなおなことばで (教) 5)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>みんな詩が書ける (教) 5)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>感動を力強く (教) 4)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>感動を言葉に (教) 4)</li> </ul>
12	<ul style="list-style-type: none"> <li>よくおもいだしてかこう (教) 10)</li> <li>じきゅうそう大かい (応) 1)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>どんなじゅんじょに書くか (教) 12)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>気持ちをこめて (教) 10)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>読書感想文を書こう (教) 9)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>表現の工夫を (教) 6)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>表現を的確に (教) 4)</li> </ul>
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>お正月 (応) 1)</li> </ul>					<ul style="list-style-type: none"> <li>新年を迎えて (応) 2)</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>こんなにながくかけた (教) 10)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>くわしく書けるようになった (教) 10)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>書いてみてわかった (教) 10)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>いろいろなことを書いてきたんだな (教) 10)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>書くことは考えることだ (教) 6)</li> </ul>	
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>2年生になりたいことをかく (応) 1)</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>物語作り (教) 8)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>卒業文集を作ろう (教) 4)</li> </ul>

( ) 内、数字は指導時数

基：基礎的技術の指導をねらいとする単元

教：教科書教材を中心とする単元

応：応用発展的単元

## 第6学年作文年間指導計画

月	単元・題材	領域	時数	目 標	指 導 事 項	主 な 学 習 活 動	因 連	備 考
4	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界を広げて</li> <li>どんな作文を書いたか</li> </ul>	教	4	◎今までの作文を読み返して物事の見方を広めたり深めたりすることの大切さに気づき、取材範囲を広げて考えを深めながら作文を書くことができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章を書くことによって自分の考えを深めること。</li> <li>根拠を明らかにし、それに基づいて自分の意見や主張を述べること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>広い世界に目を向けて取材した中から題材を一つにしぼり、主題や読み手を想定して材料を選ぶ。</li> <li>事実に基づいて自分の感想や意見を組み立て書く準備をする。</li> <li>読み手によく分かる作文を書く。</li> <li>観点に即して作文を読み合い、それぞれのよいところを見付け、作文を書き直す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>行事「始業式」</li> </ul>	
5	<ul style="list-style-type: none"> <li>読書感想文の書き方</li> </ul>	応	3	◎よい感想文を読むことにより読書感想文は、どのようなに書いたらよいかを考えさせ、書き方がわかるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章や語の内容事柄などを要約して書いたり敷衍して書いたりすること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>よい感想文を読む。</li> <li>物語文を読んで感想を書く。</li> <li>観点に即して感想文を読み合い、それぞれのよいところを見付け、感想文を書き直す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>行事「ブール開き」</li> </ul>	
6	<ul style="list-style-type: none"> <li>修学旅行</li> </ul>	応	3	◎見学したことや資料をもとにして材料を整え、文章構成を工夫して作文を書くことができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>文章全体の構成を考え、目的に応じて文章を簡単に書いたり詳しく書いたりすること。</li> <li>目的に応じて事象と感想意見などを区別して文章に書き表すこと。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>構想メモを書く。</li> <li>構想メモに従って作文を書く。</li> <li>書いた作文を観点に即して読み合い、よいところを見付け、相互評価する。</li> </ul>		

次に、「年間指導計画」の型式を、事例によって紹介する。

この表の中で、「関連」の項を設けたのは、とくに、生活文などの指導で、学校行事（同じ生活体験、共通経験に基づく一斉指導との関連を考慮して）などの位置づけを年間わたって、明確にするためである。

5. 一単位時間における指導実践例

授業の一単位時間内で、子どもが生き生きと、すすんで参加でき、教師も作品の指導にすばやく取りかかれ、常時、その力の向上が図れるような態勢にあるための、作文力育成の指導の方策を探って来た。

それには、基礎能力の学習訓練によって、作文における子どもの発想を豊かにさせ、文・文章表現の構成を円滑にしかも、明確にさせようとした。そしてまた、事中の作文記述は、その多くの場合が、短時間に作文させることとなるが、それがかえって、子ども自身の推敲も、教師からの指導も容易にさせ、作文記述後、よりすみやかな自己評価や指導が可能となり、更に、一層の作文記述意欲の向上へとつながるものと考えた。

ここでは、一単位時間内における、基礎能力育成と、作文記述力の養成とに関する指導の流れと、方法とを模索したあとを、事例を示しながら、少しくみつめてみたい。

(1) 低学年の実践例

<事例1> 1年4組 指導者 八長節子

- 単元名「のりものあそび」
- 単元について (略)
- 児童の実態 (略)
- 単元の目標
  - ・ 説明文を読んで、知識や情報を整理することができました、電車ごっこ遊びを通して、幅広い言語活動を展開することができるようにする。
  - ・ したこと、思ったことを順序をたどって書くことができるようにする。
  - ・ 必要な言葉や語句を考えて正しく書き、片仮名を正しく読み書きできるようにする。
- 指導計画 (略)
- 本時の指導
  - ・ 題材 でん車ごっこをしましょう
  - ・ 目標 電車ごっこをしたことを、順序をたどって、家の人によく知らせられるように、書くことができる。
- 展開

学 習 活 動	時間	指 導 上 の 留 意 点	評 価
1. 本時の学習について知る。	3	◦ 電車ごっこをした時のことを順序よく書いて、家の人に知らせるようにする。	◦ 本時の学習について確認できたか。(発表)
2. 電車ごっこをしたことを思い出して発表する。	15	◦ メモや絵を手がかりに、思い出したことを自由に発表させる。 ◦ 自分のした係、遊んだこと、おもしろかったことをおさえる。	◦ 遊んだことを思い出すことができたか。(発表)

3. 作文を書く	20	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 冒頭の文は、こちらで提示して書き易くする。</li> <li>◦ 3文程度書ければよいことにする。</li> <li>◎ 机間巡視をして、書けない子には、助言を与える。</li> <li>◦ よりくわしくなるよう、つけ加えて書かせる。(ことば、まわりの様子など)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 自分のした係、遊んだこと、おもしろかったことが書けたか。(作文, 観察)</li> <li>◦ つけ加えができたか(作文, 観察)</li> </ul>
4. 友達の書いた作文の発表を聞く	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 友達の作文の発表をよく聞かせる。</li> </ul>	
5. 次時の予告を聞く。	2		

◎ 同和教育指導上の配慮事項

(2) 低学年の指導過程と指導方法

事例1にみられるように、作文を書く前段階では、生活経験の想起から、作文記述に必要な言語を、口頭発表によってふくらませていく。このとき、その生活経験想起を容易にさせるために、録音、写真等を活用する。

このことは、2年生の段階においても同様である。また、実際に子供たちが経験したことのないことを取り上げるときにおいても、絵や写真等によって、児童にお話を考えさせて、作文記述へと導いていく。

ここにおける指導の過程としては、現在、実践結果から、大筋において、次の順序を考えている。

- ア 本時の学習の方向を知る。
- イ 録音や写真などによる経験の想起、絵や写真により作文記述内容を考える。
- ウ 想起したことや考えたことは、口頭発表によって、記述内容をふくらませる。  
(言語連想の結果は、児童に文字化させないで、教師が板書してまとめる。)  
(絵などの提示による言語連想には、おのずと制約があり正確には言語連想ではない。)
- エ 作文記述をする。  
(大体20分程度までの時間内で行う短時間での作文で、用紙と方法は、3-(2)による)
- オ 作文の発表を聞く。  
(机間巡視中発表予定児の選出をし、発表は、教卓近くで、教師が肩を抱いてやる。)
- カ 次時の予告をする。  
(本時とのつながりを考えて)

(3) 中学年の実践例

<事例2> 3年4組, 指導者 相場佳子

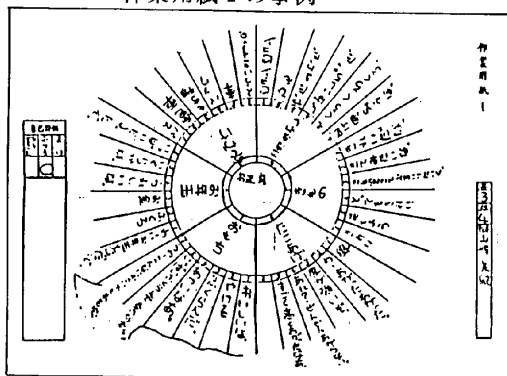
- 単元名 書いてみて分かったこと
- 単元について (略)
- 児童の実態 (略)
- 単元の目標
  - ・ 身の回りの出来事から書くことを選び, 書こうとすることについて詳しく観察しながら考えを深めて書き, 推敲を加えることができるようにする。
  - ・ 言葉の役割や性質に関心を持ち, 文章の中で生かして使うことができるようにする。
- 指導計画 (略)
- 本時の指導
  - ・ 題材 書く事柄を整えて
  - ・ 目標 「お正月」という課題で, 書く作文の材料を集めるとともにそれを整理し, 中心をはっきりさせることができる。
- 展開

学 習 活 動	時間	指 導 上 の 留 意 点	評 価
1. 本時の学習のねらいを確認する。	3	◦ 「お正月」という言葉をもとに, 書く作文の材料を集め, 書くことをはっきりさせる。	◦ 本時のねらいがつかめたか (発表)
2. 「お正月」という言葉から連想される言葉を書き出す(一次連想)	5	◦ 今年のお正月の自分の生活経験の中から, 自由に連想させる。 ◦ 思い出した順に, 作業用紙1へどんどん書きこませる。 ◎ 机間巡視で, おくれがちな児童の個別指導をする。	◦ 6つの連想語が書き出せたか (作業用紙1)
3. 一次連想で書き出したことばを新しい刺激語として, さらに, 思いうかべたことばを書き出す(二次連想)	15	◦ 二次連想により, より具体的なイメージ化を図る。 ◦ 机間巡視して, 個々の児童へのアドバイスにつとめる。	◦ 新しい刺激語をもとに, 書く材料が集められたか。 (作業用紙1)
4. 作業用紙1を見ながら, 一番書きたいことは何かを考える。 (1) 書きたいこ	10	◦ 2~3の児童の作品を例に, 作業の手順について話す。 ◦ 「いつ, だれが, なにを」, 「気もち, 考え」を入れて, 簡単な文にまとめさせるようにする。	◦ 書きたいことの中心をはっきりさせることができたか (作業用紙2)

とをきめる。 (2) 作業用紙 2 に書き出す。			
5. 題と読んでも らう相手をきめ、 簡単な構想を立 て、作業用紙 2 に書く。	1 0	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 題と読んでもらう相手のところには、あまり時間をかけないようにする。</li> <li>・ はじめ、なか、おわりのわく内に、およその書く順序を考えて、記入させるようにする。 (作文記述は、次時)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 簡単な構想がたてられたか。 (作業用紙 2)</li> </ul>
6. 本時のまとめ と次時の予告	2		

◎ 同和教育指導上の配慮事項

作業用紙 1 の事例



作業用紙 2 の事例

おわり	な	か	はじめ	おはな	作業用紙 2
おはな	おはな	おはな	おはな	おはな	おはな

この事例は、1 単位時間内の指導において、作文記述までの段階、すなわち、作文内容をいかにふくらませ、生き生きとしたものにするかということに焦点を当てて、言語連想の質的向上を図ろうとするとともに、構想メモの作成法を指導したものである。

次にもう一つの中学年の例をあげ、その段階における指導の過程と方法をまとめてみたい。

<事例 3> 4 年 1 組 指導者 坂本ちか子

- ・ 単元名 楽しかったこと
- ・ 単元について (略)
- ・ 児童の実態 (略)
- ・ 単元の目標
  - ・ 楽しかったゲーム大会の中から取材し、文章の組み立てやまとまりを考えて、構想メモをつくることができるようにする。
  - ・ 心の動きをはっきりさせ、中心点のはっきりした文章を書くことができるようにする。
- ・ 指導計画 (略)

。 本時の指導

- 。 題材 ハンターゲーム（「ゲーム開始」）
- 。 目標 小見出し「ゲーム開始」による言語連想法を用い、より適切な表現で記述できるようにする。

。 展開

学 習 活 動	時間	指 導 上 の 留 意 点	評 価
1. 本時の学習の目あてをつかむ	3	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 構想メモを確認しながら、本時の位置をはっきりさせる</li> <li>。 ゲーム中のこと（友達のこと、自分の心の動き）を家の人に知らせるつもりで書こう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 ねらいがわかったか。（観察）</li> </ul>
2. 小見出し「ゲーム開始」についての連想を書き出す。	5	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 より適切な表現ができるよう言語連想をさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 連想語が書き出せたか（作業用紙）</li> </ul>
3. 連想書き出しの発表とつけ足し	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 数多く書き出した児童に発表させ、不足分を補わせる。</li> </ul>	
4. 特に大事な表現を選び、より適切な表現（二次、三次連想→短作文）を工夫する。	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 大事な表現が発見できるようにしむける。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 表現の工夫のしかたがわかったか（作業用紙）（発表）</li> </ul>
5. 言語連想をもとに作文を書く。	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎ つまずきのある児童には、個別的に助言・指示を与え、短作文を参考にさせる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 二次、三次連想をもとに記述できたか（観察）</li> </ul>
6. 自己評価し、グループ内でまわし読みをする。	8	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 評価の基準を示し、自己評価させ、友達と交かんして読ませる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 自己評価できたか（挙手）</li> </ul>
7. 代表作品を選び発表する。	7	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 グループの中で、代表作品を選び、発表させる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>。 よい作品が選ばれたか（発表）</li> </ul>

◎ 同和教育指導上の配慮事項

(4) 中学年の指導過程と指導方法

事例3は、事例2と同様、言語連想を一次から二次、さらに三次へと高め、表現内容をより豊かに、より適切にするための言語をみつけさせている。そして、さらに、短文トレーニングを通して、それらの言語の使い方を練習し、作文記述をさせている。いわば、基礎練習をとり入れた作文記述のための指導過程のフルコースを示すものといえよう。

このほか、中学年では、観察記録文などもこの言語連想をとり入れた方法によって記述させる指導を実践しているが、この場合には、記述する事柄が眼前にあることにより、比較的記述内容がリアルに表現できる。しかし、的確に表現するため五感を通した表現を大切にさせたりもしている。

とにかく、中学年における一単位時間の指導の過程を、実際の指導事例の結果からまとめてみると、おおよそ次のような段階にまとめることができる。

- ア 題名を示す。 (小見出し程度のもので、より具体的に)
  - イ 題名についての連想を書き出す。 (2～5分程度で、思いついたところから書かせる。)
  - ウ 連想、書き出しのつけ足しをする。 (グループ内の廻し読みや発表による。1～2分)
  - エ より光ることばをみつけ出させる。 (連想の深化、二次→三次への高まり。1～2分)
  - オ 作文記述 (5～10～15分程度の短時間作文、用紙は1枚終わりしだい教卓まで取りにいく一意欲づけ。)
  - カ 自己評価をする。 (1～2分)
  - キ 代表作品を選び発表する。 (グループ内の廻し読みでの選出。)
- (キの段階での選出のしかたについて、意欲づけのうえからとくに意を用いたい。すなわち、何回かの指導のうちには、グループ内のみんなが選ばれるように、一度選ばれた者は、3回程度は選出しないようにし、4回目ぐらいになったら元に戻ってよろしい、と約束しておく。また、発表は、教卓のところで、先生がそばに付き添ってやり安心感を与えながらさせる。さらに、代表作品の表現のすぐれたところ、問題のところについて話し合わせる。作品は綴じ込んで保存させるようにする。)

この場合、中学年以上では、自己評定の尺度を示してやると効果的である。なお、段落数を何段以上等と明示して、自己評定尺度の中に位置づけると、文章内容をよりよくするのに役立つようである。

自己評定は、文章の量、段落の数等、端的に評定できるものがよい。

例、 評定、  $\frac{\text{字数}}{\text{段落数}}$  で略記、 5、  $\frac{875}{6}$  のように。

なお、この指導過程は、連想法を活用して短時間作文練習法を取り入れた場合には、高学年においても同じである。

さて、長文の指導では、文の「組立てメモ」や「構想メモ」を活用して作文指導に当てる必要があるが、この実践例を、高学年の場合について、次に示したい。

#### (5) 高学年の実践例

〈事例4〉 6年2組 指導者 安西達夫



- 単元名 修学旅行
- 単元について (略) ◦ 児童の実態 (略)
- 単元の目標
  - 見学したことや資料をもとにして、材料を整え、文章構成を工夫し、歴史的事実を加味して、作文を書くことができるようにする。
  - 心情や情景を効果的に表現し、内容豊かな作文を書くことができるようにする。
- 指導計画 (略)
- 本時の指導
  - 題材 羽田空港見学のこと
  - 目標 スライドや取材メモをもとに、言語連想を行い、心情や情景を豊かに表現した作文記述ができるようにする。
- 展開

学習活動	時間	指導上の留意点	評価
1. 本時の学習の目当てをつかむ。	2	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 心情や情景を豊かに表現している作文の記述をするということ。</li> <li>◦ 組立てメモにより本時の学習の位置を確かめる。</li> </ul>	◦ 本時の目当てがつかめたか。(発表)
2. スライドと取材メモをみて、イメージをふくらませ、言語連想する。	7	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 視覚を通してイメージを豊かにするとともに、情景表現に生かさせる。</li> <li>◦ 連想語の数から、自己評価させる。</li> <li>◦ 言語連想の中から、作文に生かせる連想語に○印をつけさせる。</li> </ul>	(◦目標25以上)
3. 連想語の中から重要語句を生かして短文を書く	10	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ ○印をつけた連想語の中から、さらに3つを選ばせ、短文作りの練習をさせる。</li> <li>◦ 短文は、心情や情景面での表現にさせる。</li> <li>◦ 短文を次の作文記述に生かさせたい。</li> </ul>	◦ 短文が書けたか(作業用紙) ◦ 心情や情景の表現ができたか
4. 作文を書く	15	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ 組立てメモにしたがって文の構成を考え、言語連想や短文を参考にしながら作文させる。</li> <li>◎ 書けない児童への個別の助言、指示、励ましに留意する。</li> </ul>	◦ 表現を工夫した作文記述ができたか。(作文、観察)
5. 相互評価をする。	5	◦ グループ内で実施させ、工夫した表現か所に線を引かせる。グループ内の人数を3～4名にする。	◦ よい表現がみつけられたか。(観察、発表)
6. 代表作文の発表をする。	5	◦ 机間巡視中に、よい作文を選んでおく。	
7. 次時の学習を知る。	1		

◎ 同和教育指導上の配慮事項





## (6) 高学年の指導過程と指導方法

取材メモ、組立てメモ、さらに構想メモ等を用いて言語連想を行い、作文記述へと進む指導においては、実践の結果から、次のようなタイプが一つ考えられる。しかし、これはクラスの実態や、取り上げる教材により、いろいろと変型することが实际的であろう。

ア 組立てメモ作り	(小見出し-小項目-を設け、長文全体の組立てを考える。)
イ 構想メモ作り	(組立てメモをもとに、小見出し内の文の構想作りを考える。)
ウ 構想をねる	(ア〜ウは、エ以下の指導と時間を分け、その前に置くことが多い。)
エ 段落ごとの言語連想	(連想書き出し、豊かな表現への連想語の訓練。)
オ 短文作り	(文作りに使える連想語による短文作りの練習。)
カ 作文記述	(短文作りを参考にした小見出し内の文作り。)
キ 読みなおし	(自分の作文を読みなおす。)
ク 相互評価	(小人数グループ内での豊かな表現の発掘。)
ケ 推敲	(取材メモ活用は効果的。)
コ 代表作文の発表	(よりよい表現へのアプローチ) (5-(4)「指導過程のまとめ」キの段階の( )書きと同様な配慮を。)

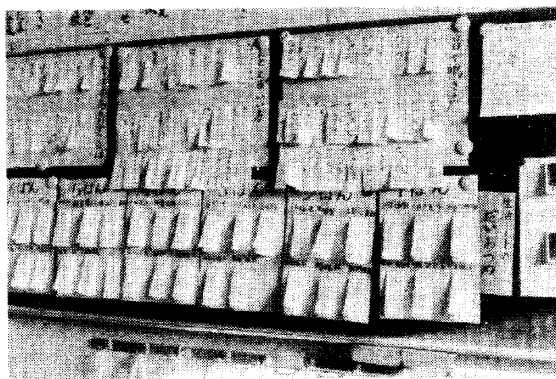
このような方法で、豊かな表現のあり方を学んだことをもとに、小見出しごとの作文を積み重ねることによって、長文はいくらでも可能であり、事実、事例4においては、400字詰原稿用紙で、80枚程度を仕上げている。

## 6. 記述の生活化への取り組み

### (1) 生活ノート

本校では、かなり以前から「生活ノート」を取り上げて、教師と児童・父母との心の交流を図っている。

子どもは、一日の中のことで、とくに書きたいことを題材に、思ったこと、感じたこと、考えたことを綴り、それを父母にみせる。家の人は読んでの感想や意見を記す。翌日、教師はそれに所感等を記し、心をつなげる。



この生活ノートは、本校児童に定着し、かなり書きこんでくる子もいる。知らず知らずのうちに、作文記述の習慣化が図られている。前頁の写真のように、2年生のあるクラスでは、その中で取り上げられた2学期途中までの題を個別にまとめ、お互いの参考にしよう、教室に掲示した。この生活ノートは、記述の生活化のための強力な一つの手がかりを与えてくれている。

<生活ノートの例>



(2) 他教科学習時のノート記述

理科や社会科などの学習時で、意図的に短文を記述させている。これも、記述の生活化への力強い歩みとなるであろうと考えている。

例えば、理科においては、次のように実施している。

- ア 記述させるとき； 実験・観察の結果。結果から言えること（考察）の自分の考え。
- イ 方法； 時間をきめ（3～5分）たり，行数を指定（3～8行位）して書かせる。
- ウ 用紙； 予め、短ざく形に更紙を切っておき，それに書きこませ，ノートにてん付させておくときもある。

以上のような記述の生活化が実践されることは、国語科の作文力育成の営みにたいしては、書くことにより慣れさせ、少しでも作文記述に対する抵抗感を取り除くことに役立つとともに、さらに、自分の気持ちや考えを表現することへの喜びを味わわせ、作文への必要感や興味を持たせることにつながるものであろうと考えている。

## Ⅵ おわりに

「はじめに」で述べたとおり，子どもの作文記述力を伸ばしたいとの願いで，現職教育の計画の中に取りこんで，2か年間，全職員の共同研究としてすすめてきた。この間，21名の教師による研究授業と，それを支える学年ブロックを中核にした実践研究とにより，教師誰れもが容易に取り組むことができ，全校的な「作文記述力育成」の指導レベル向上のための具体的方策を探ってきたわけである。

既述のとおり，ここでは，基礎能力訓練法を取り入れての作文記述力を育てるための一単位時間における指導過程を，学年発達段階をふまえて，生活文作成を中核にし，それに，感想文や記録文，さらには，意見文作りなどを交えて追究してきた。

私たちの研究の姿勢は，作文力を育てるための指導の型が初めにありき，ではなくて，実践を通して，まず，一つの原型を見出し，教師みんなが，それに通ずることによる，本校作文指導力の平均的レベルアップを目指した。このことは，一つの指導の基本型にこだわるのではなく，それをまた，固定的に考えていこうとするものでもない。考え方の基本は，あくまでも，「守」「破」「離」である。一つの指導の型を，学級の子どもの実態にしたがって，応用しながら身につけたのちは，それをもとにして，自分のものを求めてその型を破り，そこから抜け出し，更に，自己のものを作り上げていくようにしたいと念じているのである。

また，私たちが求めた，この一単位時間での指導過程内に取り入れた，「基礎能力訓練」の指導段階は，やがて，児童の発想が豊かに育ち，作文記述そのものを続ける中で，次々と，より適切な表現力をもつ言語や構成力が得られるようになってきた段階においては，取り去られていくべきものと考えている。

とにかく，このようなささやかな歩みをとおして，子どもたちの作文記述力は，著しく向上してきていると，いささか自負するものであり，私たち教師にとっても，みんなが，いつでも，容易に取り組める作文記述の指導のあり方を，見出すことができたと思っている。

終わりにになりましたが，この歩みを通して，たえずあたたかいご指導をいただいた，足利市教育委員会，学校教育課，指導係の大塚晴雄先生と，長い間の実践をとおした研究の成果をもとに，ご厚情あふれるお導きをしてくださった，本校 西田正源学校長に，全職員一同，心から深くお礼申し上げます。

(文責 現職教育係 大月敏彰)

## 評

前回と今回の教育課程の改訂のたびに、表現力、とりわけ作文力の向上がうたわれながら、必ずしも期待するほどの効果が上がっていないのが現状ではないだろうか。

作文の教育的機能を考え、更に作文に対する社会の要請を考えたとき、作文力の向上をめざした積極的な対策を立てて、実践を積み重ねることが大切である。

このような課題解決に向けた実践が本校の取り組みである。

その研究の特色をあげると

1. 児童の作文記述力を高めるために、書く抵抗を取り除き、まず文・文章が書けるようにしたこと。
2. 作文力の基礎を育成するため、言語連想トレーニング、短時間作文練習学習法等、具体的でユニークな指導法を試みたこと。
3. 指導者のだれでもが取り組めるように、指導のステップを明示したこと。
4. 大規模校なるが故に、指導法はあくまで原型を示すにとどめ、指導者がこれに習熟したなら、応用・発展・変型等それぞれ創意・工夫できるように弾力性をもたせたこと。
5. 児童が身につけた作文力を他の学習や日記等に生かせる場や機会を意図的にセットし、記述力のフォローを可能にしたこと。

などがあげられる。

特に、作文トレーニングを重視し、記述の習熟を図る実践指導では目を見張るものがある。実践授業において、与えられた題に対して児童が集中して記述している光景は、児童の書くエンピツの音しか聞こえない。仕上げた児童の顔を見ると、作文が好きか嫌いかの選択の問題でなく、「書けるのだ」という誇らしげな自信と満足感にあふれていた。